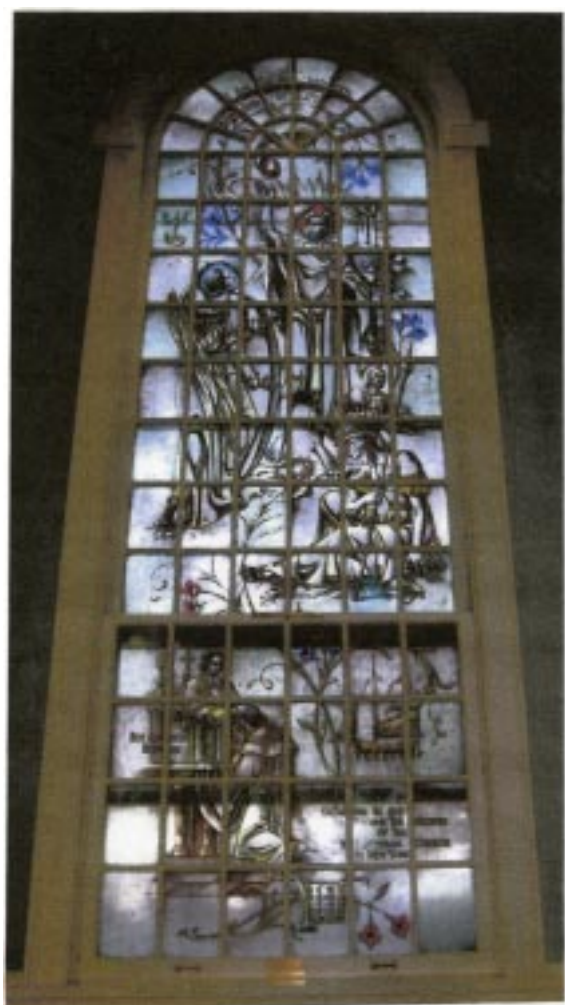


西南学院グリークラブ  
と  
「いざ起て、戦人よ」



1954年卒業  
内海敬三

「いざたて いくさびとよ みはたに つづけ!」 米国人マ・グラナハン(1840-1907) 作曲のこの歌を日本の多くの男声合唱団員は歌った事があると思う。いや、それ以上に「いくさびと」は彼等が「暗譜」で直ぐにでも歌える曲である。戦後、合唱音楽の高まりとともに福永陽一郎が「グリークラブ・アルバム」(カワイ出版)で紹介したこともあり、広く歌われるようになった。更に高等学校の音楽の教科書(音楽の友社)では混声合唱に編曲されていて、男性のみならず女性にも歌われているようである。

又各界の有名人によって結成された六本木男声合唱団が歌ったりみのもんたのTV番組で取り上げられたり、昨今はクアラルンプール、マニラ、香港等のアジア各地の日本人男声合唱祭でも歌われているのがパソコンでも検索されるほどである。

「いくさびと」の英語の歌「Rise, Ye Children of Salvation」は戦前から関西学院や同志社、西南学院の各グリークラブによって歌われていたが、太平洋戦争も間近になり、英語は敵性語であるとして排斥されるようになり歌えなくなった。

西南学院では、英文学教授\*藤井泰一郎が戦前この歌を日本語に訳した。当時日本の中国進出に対抗して英米が中国を支援したので、それに対して排米思想が高まり、更にキリスト教排斥運動が起こり、宣教師は次々に帰国していった。しかし、この厳しい状況(下記年表参照のこと)でも日本語訳の「いくさびと」は西南グリーの愛唱歌として、ことある毎に歌い続けられていたのである。この歌がいつ頃訳されたかは明確ではないが、兄、洋一が学院に入学した1939年には既に日本語で歌われていたので、日本語に訳されたのは恐らくその2、3年前の1937、8(昭和13、14)年頃であろう。

\* 藤井泰一郎(1906-1959) :西南学院中学時代(1924年卒)にグリークラブ員としてフルジュム(米人女性宣教師で西南グリー)の創立者の指導の顧問(指揮は石)を助けた。戦後はグリークラブとしてグリーの復活に貢献



藤井 泰一郎

- \* 1939 (昭和14) 年頃の日本を取り巻く状況は以下の通り
  - 1937年：日本軍上海占領、南京入場：英米に日本脅威論
  - 1938年：国家動員法公布、日本軍重慶爆撃
  - 1939年：欧州で第二次世界大戦勃発
    - 治安維持法に基づき宗教団体法制定
    - キリスト教は敵性宗教と看做され宣教師は次々と帰国
  - 1940年：日独伊三国同盟、米国は鉄鋼、屑鉄の対日輸出禁止
  - 米英ソは多額の借款を中国に供与
  - 1941年：真珠湾攻撃、太平洋戦争勃発

太平洋戦争初期、西南の学生達は「修練」の時間に松の切り株除去などの肉体労働に従事していた。夕方労働が終わって、疲れた体をひきずりながら鍬やシャベルをかつぎ、\*干隈から西新まで帰る時、グリーメンが「いくさびと」を歌いながら足並揃えて帰っているのを見て、友人達は「グリーはいいなあ」とうらやましがった。また先輩の出征の際にも博多駅で「いくさびと」を歌って送り出したという。

1942(昭和17)年7月、第8回定期演奏会の収益金で長崎の演奏旅行を計画した。しかし6月、\*ミッドウェイ海戦で戦況が一転、我が国が苦境にたたされた頃であり「時局を心得よ!」と叱責され、結局当局の許可は得られなかった。ならば、と料亭で宴会をすることになった。卒業と同時に入隊する先輩達の送別会である。彼らはずっぴんを晴らすように、「いくさびと」をはじめ、

あれこれと歌をうたううちに夜は更けていき、いつしか貸し切り状態になっていたが、料亭の女将はそんな若者の心情を察してからか黙認してくれた。更に料亭に働く人達は座敷を囲むように座り彼らの歌をじっと聞き入っていた。いよいよ宴会が終わり、灯火管制で暗い夜の町を帰るとき、さすがに涙ぐむものもいたという。

翌年、1943(昭和18)年の「学徒出陣」で殆どの学生は9月入隊が決まり、卒業式は半年繰り上げられ8月となった。結局、\*定期演奏会は暑い盛りの7月に開催された。演奏会終了後二度と共に歌うこともあるまい」と涙し、西新から中心街の天神まで約4キロ、万感の思いを込めて「いくさびと」を歌って行った。そしてこの演奏会をもってグリーは休部の止むなきに至ったのである。

戦争も末期、これといった娯楽もなく、兵役に就くことが死を覚悟しなければならないあの重苦しい時代、グリーメンはこの歌によってどれだけ癒され又勇気づけられたかは想像に難くない。

- \* 郊外の干隈から学院の所在地西新まで約3.5キロを歩いて往復した。路線バスもない時代(昭和41年頃)のこと、
- \* ミッドウエイ海戦: 1943(昭和18)年6月、日本海軍はこの海戦でその機動部隊の中核となる艦船を一挙に喪失し、以後戦争における主導権を失なった。
- \* 「学徒出陣」: 徴兵は学生に対しては26歳まで猶予されていたが、戦争末期の1943(昭和18)年、戦況が不利になるにつれ戦死者が増加、それに伴う兵力不足を補うため、高等教育機関に在学中の20歳以上の文科系学生を徴兵し出征させた。
- \* 第9回演奏会: 東京初空襲の翌年、米軍の空襲も予想される状況での演奏会で、歌う者も聞く者も、これが最後の演奏会となるであろうとの思いで会場は満席であった。最終のステージはグリーの「兵士の合唱」で、ピアノ伴奏は当時、中学生であった福永陽一郎(1926-1990)で、後に合唱指揮者、ピアニスト、音楽評論家となる。

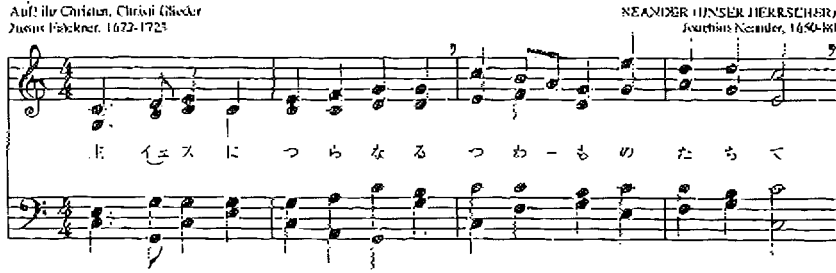
「いくさびと」は17世紀ドイツ人ファルクナーとネアンダーが作った讃美歌で、今もアメリカや日本の教会で歌われている。しかし、それは日本の男声合唱が歌っているものとは異なる。我が国で歌われている曲は19世紀、米国人マ・グラナハンが作曲したもので、アメリカで広く歌われてきた。我が国でも関西学院グリーが1920(大正9)年YMCAで歌ってから90年、男声合唱の愛唱歌として広く歌われてきた。このように「いくさびと」はドイツ、アメリカそして日本と「時空を超えて」歌い継がれてきた。今日、日本ではこの歌が異なった合唱団のメンバーでも、集まれば気楽に声を合わせることが出来る、正に「全国区」の歌として、おじさん、おじいさんだけでなく、中高生にまで幅広く愛唱されているのは驚きである。

LESSER FESTIVALS

## Rise, O Children of Salvation

182

1 Rise, O chil - dren of sai - va - tion, All who cleave to  
 2 Saints and mar - tyrs long be - fore us Firm - ly on this  
 3 Fight - ing, we shall be vic - to - rious By the blood of  
 4 When his ser - vants stand be - fore him, Each re - ceiv - ing



そして藤井泰一郎の日本語訳がなかったならばこの歌は単なる英語の歌として戦争の混乱の中で永遠に忘れ去られ、これほど多くの人達に歌われるようにはならなかったであろう。

「いくさびと」の長い歴史、特に戦争中、学業半ば出征し、再び共に歌うことを願いながらも戦死した諸先輩を想う時、我々はこの歌を誇りをもって永く歌い続けなければならないと思う。

Rise, Ye Children of Salvation  
いざ起て、いくさびとよ

Rise, Ye Children of Salvation,	起て、汝等 救われし子供等よ
All who cleave to Christ the Head;	頭なるキリストに忠実なる者は皆
Wake, arise! O mighty nation,	目覚めよ、立ち上がれ! おゝ力強き民よ
Ere the foe on Zion tread.	敵が (聖地) シオンに攻め込む前に
Pour it forth the mighty anthem	高らかに力強き賛美を歌え
Like the thunders of the sea	海の雷鳴の如く
Thro' the blood of Christ our ransom	あがない主キリストの血によって
More than conquerors are we.	我々は勝ち得て余りあるのだ

註

salvation: Fact or state of being saved from sin & cets (ROB)uen

この語があるので救世軍 (Salvation Army) の歌であると誤解されている。救世軍は1865年英国で誕生したが、この歌はその100年以上も前にドイツで作られ、救世軍とは関係はない。因みに救世軍は軍服を着て街頭で「社会綱」を置き、トランペットを吹きながら医療、福祉施設や路上生活者への援助、募金をしているのを見かけるが、戦争とは無縁のプロテスタントの教会。

ere (詩、古) = before: ~しないうちに

foe (詩、文語) = enemy: 敵

tread on : 踏み込む 二行目の末尾の t と Head の音を合わせる「脚韻」のために、

Ere the tread on Zion の語順を変え(倒置) Ere the foeadonと Zion,

脚韻は一行目と三行目の -tion、6行目の sea と8行目の we、5行目の a と7行目 ransom の場合も同じ。

Zion : シオンはエルサレム東の丘、ソロモン王が神殿を建て「聖なる山政治の中心地」とされる。又、象徴的にユダヤ民族やイスラエルをも意味する。

Thro'=Through :... によって

more than conquerors are we: we are more than conquerors

6行目の sea と韻を合わせるための倒置で、新約聖書ローマ人への手紙8章37節からの引用

Nay, in all these things are more than conquerors through him that (King James Version)

わたしたちは、これらすべてのことにおいて勝ち得て余りがある。(日本聖書協会版)

(勝利者 conquerors 以上 more than である = 勝ち得て余りがある)